

【報告】

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究
「人類学におけるマイクロ-マクロ系の連関」第1回公開セミナー
「『狩り狩られる経験の現象学』の著者菅原和孝氏を囲んで」

日時：

2015年6月7日（日）15時～19時

場所：

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階マルチメディアセミナー室（306号室）

1. 菅原和孝（京都大学名誉教授）著者による概要説明
2. 佐久間寛（AA 研所員），奥野克巳（立教大学）コメント
3. 全体討議

司会：西井涼子

参加者：参加者 18人

内容：

はじめに菅原和孝氏から約1時間の口頭発表があった。『狩り狩られる経験の現象学』の概要が解説されるとともに、豊富なカラー写真を用いて、同書に登場する野生動物の姿が詳しく紹介された。

コメントとしてはまず佐久間が、氏とおなじアフリカニストという立場から発言した。理論から文体に至る全体が入念かつ用意周到に構成されている『狩り狩られる経験の現象学』の魅力——とくに「変身」をめぐる記述の魅力——を、「反コミュニケーション」としての「畏」という概念に着目して論じた。

つぎに、動物をめぐる人類学研究の分野では第一人者のひとりである奥野克巳氏が、2万字を超える詳細な「読書ノート」（配付資料）にもとづきつつコメントを行った。奥野氏自身のフィールドであるボルネオのプナン社会の事例や、エドゥアルド・コーンの『森は考える』の議論と対比させることで、『狩り狩られる経験の現象学』で展開された議論のさらなる可能性が提示された。

二名のコメント後には、フロアからの質問に応じるかたちで活発な意見交換が行われ、盛会のうちに幕を閉じた。

当報告の内容は著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.